
風わたる

沙山はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風わたる

【Nコード】

N3044M

【作者名】

沙山はるか

【あらすじ】

社会人何年目かの青年と、不思議な女性とのおかしな関係から、いつしか身近な存在がなくてはならない存在と想うようになってゆく。

出会い（前書き）

2年くらい前に書いて、他の作品を書いていたら、真っ白になってしまった作品です。

ですから、1、2話のベースは以前のままですが、改めて書き直して再スタートです。

出会い

どうも蒸暑くてイライラする。

だから、オレは梅雨はキライだ。

今日もいつもと変わらない毎日だ。

会社では禿げた上司に業績不振の憂さ晴らしにオレは怒鳴られる。
一通りの説教と午前中の打ち合わせを済ませると、挨拶回りと称して狭い箱を抜け出した。

どうせ同じ空間に居たって代わり映えないグラフと睨めっこ。
ならば、お得意さん周りをして季節商材のPRをしに挨拶回りをしていた方が、よっぽどいいに決まっている。

サンプル商材とポスターが入ったダンボールを車に詰め込んで、マ
ーキングした愛用の地図とケータイを持って出発だ。

型落ちの営業車を走らせると、ラヂオからは流行りのJ POPが
流れてくる。

鼻先でハミングしてみる。

メロディーだけは何度も耳にしているから覚えてるが、歌詞なんて
知らない。

名前も思い出せない彼女の甲高い歌声は、オレには合わないらしい。
何故ならこの蒸暑さを倍増させるからだ。

カーエアコンはかけているけど、走り出した車内はサウナ状態でス
テアリングも火傷するほど熱い。

腹がグウつと鳴った。

県境にある大きな川の河川敷で昼にするか。川からの風がこんな日
は気持ちがいい。

仕事なのはもつたない、自転車で河川敷を走り抜けたいくらいだ。昼飯を調達してくると、早めのお昼を食べて土手に寝転がっていた。そこでオレは不思議な彼女と出会った。

一見なんでもない風景なんだけれども、ジッと凝らしているとそれが分かった。

彼女が声なき会話をしているようだ。

その度に風が強く吹いたり、弱く吹いたり、あるいはピタリと止んだりするのだ。

初めは自分に

大丈夫か、オレ。今日は疲れているだけじゃないのか。

錯覚、そう錯覚だ。この蒸暑さのせいだ。暑くておかしくなっちゃったんだ、きっと。

なあんて思おうとしていたのに、聞いてしまったんだ、その声を。

「ねえ、風さんはどう思う？ 明日話したほうがいいかしら。」

「サワサワ」と風は優しく吹き抜けていった――

「やっぱりそう。仕方がないわねえ。気合を入れていくしかないわね。ありがとう（*^o^*）」

「ふわあ」と彼女の事を包むように風は吹き、止んだ――

彼女は目をつむったままニッコリと笑って

「はいはい。明日、結果報告にここへ来ればいいんでしょう。分かりました。」

――再びふわぁっつと吹いたかと思うと今度は、ボワァっつと音を立てて勢いよく上昇気流のように吹き上げて、最後にはまた優しく流れるように吹いて去っていったように感じた――

その間のオレの思考回路は「？」

の嵐だったのは言うまでもない。

頭の中では一生懸命理解しようとしているオレと
白昼夢の続きだから気にすることない。

と呼びかけるオレがいた。

寝転がったオレの左斜め上っていうのかな、そんなあたりにちょうどデカイ木があった。

その木の反対側に膝を抱えるように座った彼女は、宙を見上げていた。

たぶん15分かそこらだと思う。

気持ちよさそうに風をあおぐように目をつむったままの彼女にみとれているオレ。

そんなオレ自身を客観的に気づいたのと、今までのオレの生活には考えられないシーンすぎて固まってしまった。

もう一人のオレが囁く。

今ここでピクリと動いたり、微かな物音でもたててしまったら、ど

うなるか分かっているよなあ。この全ての状況を壊してしまうだろう。オレのせいだな！

背筋を冷たい何かが走った。

ただただこの瞬間を壊したくなくて、このまま見つめていたくて、そつとケータイを上着のポケットにしまい、マナーモードにした。つていうかそれがオレに出来る精一杯だったと思う。

よくよく考えてみると何故こんな行動をとったのか今になっても良く分らない。

出会い（後書き）

さてさて、イメージばかり膨らんで手が追いつきません。

ことば（前書き）

焼き直して感じの作業だったので、ぎこちないか不安なんです。が、投稿しちゃいます。

次回からはホントに真っさらスタートなので、どうなるか自分自身わかりません。

やっと話せたのに……もどかしい二人です。

いとは

河川敷から親水公園が続く。

梅雨の晴れ間を利用して、川向かいに広がる団地のベランダには布団がたくさん干されていて眩しい。

面積の広い白つばさが並びまくってソーラーパネルかよ。って感じだ。

そういえば、彼女を見つめてどれくらい経ったんだ。

確かオレがここへ来たのは昼前ぐらいで、太陽の位置からしたら恐らく1時間程度つてところだろう。腕をあげて時計を見るのも怠いそれに彼女に気づかれてしまう。なるべくじっとしていたかった。

すると、何を感じたのだろうか、すう〜と立ち上がって両腕の上に伸ばし、背伸びをしているようだ。

彼女は一瞬固まった。

しまった！オレに気がついたのだろう。少し頬を赤らめて、急いでしゃがみ込んでしまった。

何か話さなきゃって思えば思うほど、言葉が見つからない。

「大丈夫だよ。隠れなくても。オレの方こそゴメン。」

っていうかおい、何謝ってるんだ？ オレ。

「いえ、こちらこそ。すみません。」

一瞬だけどさつき背伸びをしていた姿は逆光になってキレイなシルエツトで、瞼にやきついて忘れられない。

まるでなんかの占いのカードみたいなの、アンティークな壁画みたいな、上手く言えないけどそんなふうに見えた。っていうかもう一度見てみたい。

それに一言だったけど僅かに聞こえた小さなその声は、とても耳に心地いい響きだった。風に話しかけている時と違って、少し緊張している感じがまたいい。

こんな風を感じるなんてオレらしくもないが、やっぱりもう一度彼女の声が聞きたい。

色んな衝動が頭の中を駆け巡った。

勢いなのか勇気なのか分からないが、とっさに口について言葉がとんでもない訳の分からない言葉で、オレ自身どうしようもないヤツだよな。つつくづく嫌になった。

「もう一度、聞かせてくれないか？」

「は？ えっと。」

ほらな、意味不明なこと聞くから迷っちゃってるじゃないか！

完全にオレ、ヘンなヤツだと思われてるよ。

何か言って会話を続けないと！

「ゴメン。イヤなんでもないんだ。気にしないでくれ。ただ、ただ。何ていうのかな、もう少しこのままでいさせて欲しいんだ。」

「はい。分かりました。」

戸惑いと恥じらいの入り混じったような声で返事をしてくれた。
ゆっくり交わされた言葉の間にも、頭の中では次は何を言おうか。
何てきり出そうか。ぐるぐると言葉を巡らせていた。さながら十代
のまだ青い頃みたいにとドキドキしながら。

落ち着いて考えてみたっておかしな話だ。絶対フツーだったら知らない男に”このままでもいいさせて欲しいんだ”なんて言われたら、どんなヤツだって怪しいって思うはずだ。

うん。やっぱり聞くのは1つだろう。それが一番自然な流れだと思うしな。

「いきなりだけど、聞いてもいいかな？」

「誰と話していたか。ってことですか？」

「え?! いや、まあ、そうだけど。 風とだろ。」

「分かりましたかあ。 まあ、そうですね。 お恥ずかしいんですけど、忘れてください。」

恥ずかしい事? 彼女はそんなふうに思っていたのか。

全然恥ずかしい事じゃないのになあ。

確かに初めは不思議だな。 つとは思ったけど、何故かイヤな気持ちじゃなかったし。

「いや。全然恥ずかしいことじゃないと思うぞ。むしろ、すごいと思うけど。」

「普段は心の中で聞いたりしているんですけど、ココだと自然と口

にしちゃって。

「ぜんぜんすごい事じゃないですよ。いい年してって感じですよ
え。」

確かに恥ずかしいって思っていた事に対して正反対のスゴイ事なん
て言われたらな。

しかし、いい年してなんてオレより5歳は確実に下に見える。学生
だよな、たぶん、絶対。

「私も聞いていいですか？」

オレは逆に驚いたが、しつかりと頷いた。

「どうして聞かないんですか？ 私がこうして話していること。」

「いや。別に。心地よかったから、かな。」

それより明日、頑張れよな！ よく分からないけど。何か頑張る
んだろ？」

「はい？ え？ / / あっはい。でも、いいんです。別に大した
ことではないです。」

その後は、それこそ大した話はしないで軽く「じゃあ、また。」と
と分かれた。

午後は挨拶周りに行ったけど、やはり頭のどこかで、全然初めて話
す感じがしなかったのは何故だろうかという事ばかり考えていた。

とりあえず、明日同じ時間同じ場所で彼女を待つことにしよう。
そうすれば謎が解けるはずだし。
名前だ。名前も聞いてなかった。

明日は名前を聞くとこからはじめよう！

って何段取り考えてるんだよ。オレ。

君の名

昨日とはうって変わって散々な土砂降りだ。

なぜだろう。オレは彼女が絶対に必ず来ると感じて、逸る気持ちをムリヤリ抑えて時を待った。

あまり早くも遅くもなってはダメだ、昨日より若干早いくらいがちょうどいい。

デスクトップの端っこにあるデジタル時計が10時半を過ぎると、ソワソワ感が頂点に達した自分に気付く。

ハゲヅラの上司に捕まらないうちにサッサと脱出だ！

とりあえず、出来るだけあの場所に近い位置に車をつけよう。

あとは行ってから考えればいい。

それから、今日は彼女の名前を聞かなければ！

そんな事など色々と考えながら土砂降りの雨の中、会社のボロ車を運転していた。

堤防沿いの国道を走りながら、ふと頭を過ぎった。

傘一つさしてなかったら……いや、仮に傘をさしていても、この雨の中じゃ役に立たないだろう。

温かい飲み物でも買って行こうか？ でもいなかったら仕方がないか。

コンビニを横目に走り、通り過ぎた。

ワイパーが忙しく雨水を掻き分ける。

まるでオレの気持ちのように落ち着きがない。

遠くにあの木が見えてきた。

その元に赤い点が見える気がした。
それはだんだん近づくにしたがって、気ではなく確信出来るようになる。

もつと近づくと赤い傘がクルクルと回っているのが分かった。
それを見て少し安心した。

「やあ。今日は凄いい雨だな。」

「こんにちは。……えつとお。」

軽く会釈をしてから大きな瞳が宙を泳ぐ。

「オレは、双木^{なみき} 龍治^{りゅうじ}。双子の双。樹木の木。で“なみき”っていうのさ。まあ、”龍治”でいいよ。」

「はい。りゅ、龍治さん。昨日はありがとうございました。」

あつ、私は倉橋^{くらはし} 友里恵^{ゆりえ}です。」

少し表情の明るい彼女は、声のトーンも明るめで軽くお辞儀した。

「えつ あつ いやあ。オレは何も、してないし。」

でも、君がそう感じてくれるなら……どうも、どういたしまして。

「

「実は今朝、ずっと声をかけようと思っていた方に話しかけてみたんです。でも、なんかしっくり来なくて……でも、いいかな。って吹っ切れたんです。」

百年の恋も一瞬で、っていうあの感じが分かる気がします。

言葉ってすごいですね、どんなに色々取り繕ってもとっさに出る言葉ってというのは飾れないですものね。」

そこまでゆっくりだけど、一気に話すと深呼吸のように彼女はふっ

つと息をついた。

そして少し表情が曇ったかと思うと、一筋の涙が零れた。言葉がつまって上手く言葉にならないのだと察した。

それに、それ以上はオレ自身も聞く必要もないし、聞けないし、別にそこは重要じゃないと思った。

ただ何とか励ましたくって勇気づけてやりたくって一生懸命にオレは言葉を探した。

気が付けば雨の激しさは弱まり、次第に空も薄明るくなってきた。川からの風が湿った空気を包み込んで何処かへ運んで行ってくれるかのように、爽やかに頬を過ぎる。

細かい雨粒が吹きかかる。

どこか遠くからオヤジバイクの音がする。おばちゃん自転車も堤防沿いの道を走る。

そんな音に反応してか、傍の大きな樹の枝から雀がたくさん飛びたっていく、枝から弾かれた雨水が傘に当たってバラバラ音がする。雨が上がり始めて、景色が動き出してきた。

「風邪の様なものかもしれないよ。早目に分かれば、直ぐに治療して早く治るし。」

「ふふふつ。龍治さん、ありがとございます。そうですね。ホントにそうですね。」

そう言って空を仰ぎ見た彼女にふんわりと風が吹いた。

黒い長めの彼女の髪が舞い上がるようになびかれて、かすかに止まった後、優しく撫でるように吹いた。

「もしかしたら……」

「え？ 分かつちやいました？ すみません。」

「いや、謝らなくてもいいよ。 うーん、そうだ！ 腹へらないか？ 昼でも食べに行こうか。今日はオレのおごりだ。 大した物はご馳走できないけど。」

堤防沿いの道に止めたボロ車に乗った。

彼女は昨日のお礼に美味しいカフェレストランを紹介してくれた。そこは以前ローカルタウン誌に紹介されて知ったとか。最近は広告こそ出していないが、美味しさとボリユームのわりにリーズナブルな点がりピーターをよんで、ピークタイムは待ちの客が並ぶほどだという。

それでも、時間帯を選べばゆっくり出来る雰囲気も気に入っているらしい。

後で店についたら会社に電話して、今日は午後から病休をとるとしよう。

ランチ

人生というものは分らない。

昨日の彼女との出会いがなければ、こんな風に寝不足になって苛立つ事もなかった。

いつもの様に気だるい気持ちで出勤して、ボロの営業車を走らせ、ただなんとなく過ごす毎日を繰り返すだけだった。

カーテンを開けると朝とは思えないような暗く重い空が広がっていた。

どれだけ降れば気が済むんだ？と空に問いたくなるようなほどバシヤバシヤと音を立てながら降り続ける雨。

アスファルトは色濃く染み渡り、いくつもの小川が出来ている。

夕べは風と雨とが激しく吹き荒れていて、窓を強く叩きつけていた。まあ、それに比べたら少しはマシにもなったってところか。

その音のおかげで寝起きは最悪。

尤も眠りは浅いままだったから、寝起きなのに疲れが抜けきらない釈然としない感覚だった。

風や雨音だけでなく、彼女の事が気になってなかなか眠れなかったのも確かに少しはあるだろう。

そう少しだけだ、きつと少しだけ。

そして、仕事もロクに手をつけずに飛び出したオレの目に飛び込んできたのは、約束もほとんどないまま土砂降りの中赤い花のようにあの場所に立っていた彼女だった。

確かに『じゃあ、また明日。』と言って昨日は別れたけど。

名前も知らない、ただ居合わせただけの間柄の二人なのに、オレが来ると信じて待っていてくれた。

彼女の決意した何かが良い結果にしろ、そうでなかったにしろ、今のオレには関係ない。

今の今、一緒に話しが出来るだけでいいと思ってる。

彼女は友里恵といった。

やっと名前を聞いた時は、10代のガキみたいに内心喜んでみた。そんな自分自身が可笑しくも思えた。

彼女は不思議な女性だ。

一言でいうと「見ていて飽きない」。

不思議と言ったら、やっぱり風と話をする事だ。

不思議だとは思ったが、別に变だとか恥ずかしいことだとは思わなかった。

だけど、彼女自身そのことを恥ずかしいことだと言う。

身のこなしと同じように緩やかな時間を好む。

時々、表情にしろ、言葉にしろ、くるくると変わって、予期しない言動に驚き戸惑うが、厭味がなく新鮮に思えた。

とにかく彼女の一つ一つの言動が新鮮で目が離せないでいる自分がいる。

思いつきで誘ったランチだったが、目に見えない何かに引き寄せられるように事が運んでいるような気がしてならない。

彼女が教えてくれたカフェレストラン『ドルチェ』

太めの木枠と小洒落た磨りガラスにレースのカーテン。
クラシックのBGMがしっとりとした空間に馴染んで、いかにも女

性が好みそうな、男同士だったら少々気恥ずかしくて決して足を運ばないだろう店構えだった。ちようとオレ達が店に入ると、精算しているカップルがいて、入れ替わりですんなり席に座れた。

彼女のオススメで、二人して日替わりセットのデザート付きを頼んだ。

前菜のサラダをつついたり、自家製パンを食べながらどんどん会話が弾んだ。

オレは取り繕おうとかカッコつけようとか、全然意識しないでフツ―に話せた。

面白みの一つもないオレ自身の事、最近観た映画や気になる音楽の話だとか、他愛もない話の一つ一つに微笑みながら頷いて耳を傾けてくれている。

「なんだかオレばかりしゃべってばかりだな。いつもはこんなに話さない方なのに。」

照れ笑いを隠す様に頭を少し掻いてみる。

「ありがとうございます。龍治さん。」

「なっなんで、礼を言われなきゃならないんだ？ 店だって君に紹介してもらったし、面白くも無い話に付き合ってくれて、礼を言うのはこっちの方さ。」

「そうだ、良かったらでいいんだが、今度は君の事を聞かせてくれな
いか。少しだけでいいから、さ。」

彼女は俯き加減になって、食べかけのパンを皿に置いた。

そして、軽い吐息の後、ゆっくりと視線を上げていき窓の外を見ながら話しはじめた。

何となく改まった気分になり、組んでいた足を下ろして座り直した。

「絵を、描いてるんです。 そんな大したものじゃないんですけどね。」

本の挿絵や企業広告やパンフとか、依頼されたものを一つ一つこなすのが精一杯なんだけど。

普段は、仕事場にこもってひたすら描いてるんです。

朝の散歩と、時々息苦しくなったり煮詰まったりイメージが固まらなくなったり悩んだりすると、河川敷に行くんです。

こんな生活も事務所が決まって実家を出てきてからだから、もう3年くらいですかね。」

「なんかすごいな。 オレなんかただ毎日流れるように過ぎていくだけのなに。」

自分では口に出すつもりはなかったんだけど、つい言葉に出してしまっていた。

本心だったから隠すことは何もないんだけど、彼女の言葉を遮ってしまって話が終わってしまうのが嫌で言葉に出したくなかったんだ。

「龍治さんって、面白い方ですね。」

「え？ そうかな。」

「はい。だって、私なんかの事に”すごいな”って何度も言うてくださるから。」

不思議と心地よく流れる時間。

少しずつキレイに盛り付けられたプレート、バジルの練りこまれたロールパン、オレのアイスコーヒーと彼女のレモンスカッシュ。食べ終わったプレートから片付けられてゆく……

そして、彼女の一番のお勧めでもある日替わりデザートのパレート。

彼女との距離が少しだけ縮まった気がした。

今まではただ鬱陶しいだけだった梅雨空も、湿った風が吹くだけで彼女を感じられる。

まるで彼女がすぐ隣りで話しかけてくれているような感じがしてくる。

それに比較的夜型だった生活を朝型に変えてみようかな。なんて思っているオレがいる。

人生は、ホントによく分からないものだ。

違う私

私の日課、朝の散歩。

風は凪いでいたけど、雨はまだまだ降っていた。

今日は勇気を出す日。

今までは見ていただけで充分満足だったのに、ハッキリさせたくな
った。

風さんと約束したって勇気が出ないでそのままいつも通りの朝を過
ごす。っていうことも出来たはず。

今までだって似たようなことはあったし。

でも今日は違う。昨日、彼にも聞かれてしまったから。

赤い花柄の傘をさして、この梅雨を楽しく乗り切るために新調した
ばかりのショートレインブーツを履いて歩く。

いつもの道順でゆっくりと歩いてゆく。

いつもの公園、いつものコンビニ。

「いらっしゃいませ、おはようございます。」

いつものコンビニのお兄さんが、今日も笑顔で挨拶してくれる。

何度この笑顔に救われたか知らない。

何度この笑顔に包まれたかと思ったか知らない。

だけど、それは仕事だから……そんな事は分かっていたんだけど、

もっと声を聞きたくて。

もっと私だけのための言葉をかけて欲しくて。

いつもは俯いて通り過ぎて朝食を物色するために店内を巡る。けど、今日は違う私だから。

「おはようございます。よく降りますね。」

「……………」

もう既に手元を見て何か伝票整理みたいなことを始めてしまっていた。

その瞬間、私の中で何かが音をたてて崩れてゆくを感じた。その後はぐるっと店内を巡って出てきてしまった。

ぼんやりと家路についた。

朝食を摂ることもせず、着替えもせず、ただただぼつんと座り込み時間が過ぎていった。

数時間後、足の痺れで我に返った。

「ふふふつ。」

どんなに悲しい想いをして、お腹も空くし足も痺れるんだ。って思ったら一人笑いが出て、同時にある事に初めて気付いた。

あんなにも心の中で慕っていたはずなのに、放心状態で何もする気を失っていたのに、悲しくない訳ないのに、涙の一粒すら流れてこない。

ふと見上げて時計を見る。

10:30 になろうとしていた。

洋服を並べて選んで、慌てて着替えて、髪を梳かして、鞆を手にして玄関を飛び出した。

いつもならレインブーツを履いていても水溜まりを避けて歩くのに、急ぎ足は止まらない。

あの大きな樹の下で彼が待っている気がしてならないから、不思議なドキドキが止まらない。

風との話を「すごい！」と言ってくれた彼が待っている気がして走った。

大きな樹の下に着くと誰もいなかった。

赤い花柄の傘をクルクルと回してドキドキを鎮めようとしてみた。

昨日彼が去って行った方角をキョロキョロと見渡しながら、傘をクルクルと回して待っていた。

雨粒が舞って顔に当たる、湿った風がフワッと吹いて瞬きをした瞬間に見つけた。

真っ直ぐに走ってくる彼の姿を。

何故かドキドキはホッとした安心感に変わり、楽しい気分になって、また傘をクルクルと回していた。

「やあ。今日は凄い雨だな。」

やっぱり昨日みたいに爽やかに話しかけてくれる。

つられて私も軽く会釈をして自己紹介とお礼を言う。

そして、なぜだか洗いざらい今朝の出来事を話してしまったりした。

「実は今朝、ずっと声をかけようと思っていた方に話しかけてみたんです。

でも、なんかしっくり来なくて……でも、いいかな。って吹っ切れたんです。

百年の恋も一瞬で、っていうあの感じが分かる気がします。

言葉ってすごいですね、どんなに色々取り繕ってもとっさに出る言葉ってというのは飾れないですものね。」

自分でも驚いた。

そこまで一気に話してから一筋の涙が零れた。

一人で部屋にいた時には出なかったのに……

雨は弱まり、だんだん空も薄明るくなってきた。

僅かな沈黙の後、龍治さんは言ってくれた。

「風邪の様なものかもしれないよ。早目に分かれば、直ぐに治療して早く治るし。」

「ふふふつ。龍治さん、ありがとうございます。

そうですね。ホントにそうですね。」

そう言っつて、彼に巡り逢わせてくれた風さんに、心の中でお礼を言った。

ふんわりと風が私の髪を舞い上げるようになびかせたりして“どう致しまして”と吹いていった。

「もしかしたら……」

「え？ 分かつちゃいました？ すみません。」

「いや、謝らなくてもいいよ。」

うーん、そうだ！ 腹へらないか？ 昼でも食べに行こうか。
今日はオレのおごりだ。大した物のご馳走できないけど。」

一人で時々行くオシャレなお店、カフェレストラン『ドルチェ』を
紹介して

二人で日替わりランチを注文した。

何故あの店を選んだのか自分でも分からない。

だけど、いつもと違う私のすることだから、理屈なんて分からなく
たっていい、ただ思いつきでたっていいと思った。

彼は風との会話を「すごい！」って言うてくれる面白い人。
失恋した私を気遣かって、楽しい話をたくさんしてくれた。
仕事や映画の話、よく聴く音楽の話とか一所懸命にどんどん話して
くれた。

えーっと

「中小企業の食品メーカー」って言うてたけど、私でもよく知って
いる有名な食品メーカーに勤めること。

「今はまだまだ下っ端だから、いつもハゲヅラ上司にある事ない事
言われて突かれている」って（笑）

その上司さん一度見てみたい気がする。

「ちよっと親父混じりの25歳」っとはいうけど全然オジサンじゃ
ないし（笑）

しかも、もっと年上かと思ったら2歳しか私と違わないし。

今は禁煙中らしく灰皿を店員に返してた。「何とか3週間目に入っ
たところだから頑張ってるんだ」って言うてた。きつと龍治さんな
らこのまま止められると思うな。

「お酒は強い方じゃないけど飲むのは好き」って言ってたなあ。一緒に飲みに行ったら、きつと楽しいお酒が飲めそうだなあ。

「映画はSFやギャング系が好きだけど、ホラー以外は大抵なんでも観る」って、最近は『シャーロック ホームズ』を観たって。私も観たいなあって思っていた映画だわ。

きつと楽しい話をいっぱい用意して話してくれんたんだと思う。それにどんどん引き込まれてとっても楽しい時間が過ぎていった。

最後に龍治さんは、私の話を聞きたいって振ってきたけど、私の毎日や私自身の事を振り返ったら沈んできちゃって、あまり話したくなくなってきた。

それでいつもなら口をつぐんでしまっけど、やっぱり今日の私は正直に素直につまらない毎日の事を話してしまった。

なのに龍治さんはまた「すごい！」って言うてくれた。

思いつきり恥ずかしくなった。

たくさんおしゃべりして美味しいモノ食べていたら、すっかり雨も上がって虫の鳴き声がするくらい外も薄日が差してきて、あちらこちらの水溜りやフェンスに付いた水滴に日光が反射して、街がキラキラとしていた。

長い一日だったなあ。

あつ長い半日か、だってまだ夕方にもなってなければ、おやつの間にもなってないわ。

まあとにかく、それでも一つだけ違わないのは、朝の散歩は公園を歩いたら土手の方に回ってあの大きな樹の下で一休みをするの。

風わたる時 会話がなくても 笑顔の二人がいる

次は誰の傍で吹くのだろうか

違う私（後書き）

短編にも長編にもなれない、中編？って感じの長さになってしまいました。が、とりあえず龍治と友里恵の距離が縮まるまでをコマ送りのな感じ絵描きたかったので終了です。

この二人のその後も書いてみたいなあとも思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3044m/>

風わたる

2010年10月14日23時03分発行